

平成 21(2009)年度 大学生の力を活用した集落活性化調査委託事業 報告書

こころの活性化



立正大学地球環境科学部地理学科

熊谷地理研究所

GeoStick
熊谷地理研究所

目次

I	はじめに	3
1.	サークル概要	3
2.	地域概要	3
(1)	いわき市川前町の位置	3
(2)	いわき市川前町の人口	4
3.	調査概要	4
(1)	基本データ	4
(2)	調査内容	4
(3)	調査スケジュール	5
II	調査結果	6
1.	事前調査	6
2.	聞き取り調査	7
3.	ひまわり会議	12
4.	調査を通しての変化	13
IV	活性化案（こころの活性化にむけて）	15
1.	全体像	15
2.	すぐにとりかかれる活性化案	15
3.	将来的に実行したい活性化案	16
V	おわりに	17
謝 辞		18

I はじめに

1. サークル概要

「地理を知りたい!!」という思いから 2008 年 5 月に発足した立正大学の文化学芸愛好団体（サークル）です。地理学とは「地域」を様々な側面から研究する学問です。地理学という視点から様々な地域を研究していこうと考えています。現在、立正大学地球環境科学部地理学科の学生 9 人が所属しています。大学の所在地である熊谷を中心に、地域活性化や里山保全活動など、地域にかかわる幅広い活動を行っています。

2. 地域概要

(1)いわき市川前町の位置

いわき市は、福島県の東南端に位置し、茨城県と境を接する広大な面積を持つまちです。東は太平洋に面しているため、寒暖の差が比較的少なく、温暖な気候に恵まれた地域となっています。地形は、西方の阿武隈高地（標高 500～700m）から東方へゆるやかに低くなり、平坦地を形成し、夏井川や鮫川を中心とした河川が市域を貫流し、太平洋に注いでいます。



図1 いわき市川前町の位置

(2)いわき市川前町の人口

川前町の人口は、林業が最盛期を迎えた 1956（昭和 31）年に 3,892 人まで増加したものの、その後は減少が続き 2009（平成 21）年には 1,391 人となってしまいました。人口構成を見ると、2009 年現在では 55 歳以上の人口が 50%以上を占めており、高齢化が進んでいることが読み取れます。また、調査対象地域である高部集落は 55 歳以上が約 80%で、65 歳以上が約 50%を占めるなど高齢化が深刻化し、子供のいない集落となっています。

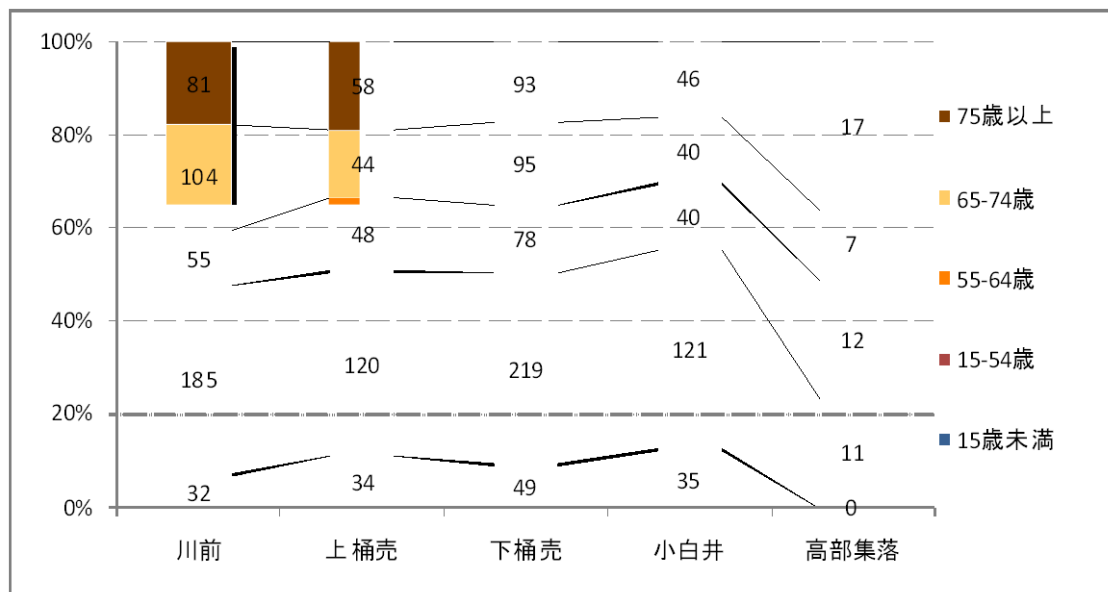


図2 いわき市川前町の人口構成（2009年）

3. 調査概要

(1)基本データ

ゼミ名	熊谷地理研究所
ゼミ代表者名	浜田大介
調査実施者	鳥海真弘、田村健太郎、吉池隆、清水康志、佐藤竜也 大塚隆弘、佐藤亮太
指導教員名	高木亨（立正大学地球環境科学部地理学科非常勤講師）
調査対象集落名	福島県いわき市川前町第9行政区高部集落

(2)調査内容

現地を訪れる前に事前ワークショップを行い、高部に対するイメージをまとめて基本的な情報を収集しました。現地では、2班に分かれて一軒一軒を訪問して聞き取り調査を行いました。その際には、事前に準備した調査表（図3）をもとに聞き取りを行いました。その結果をもとに集落の住民の方々との意見交換を行うために「ひまわり会議」を行いました。一連の調査をもとに「いいところマップ」を作成し、今後の活性化策をまとめました。

チェック欄

質問票

☐
☐
☐
☐
☐

- ・住民が好きな風景は？
- ・川で泳いだことはあるか？それはどこか
- ・危険な場所などはあるか？
- ・郷土料理はどうか？よくとれる食材はあるか？
- ・お祭りはどうか？どう思っているか？
- ・この町は住みやすいか？

住民が思う郷土の自然と文
化について

☐
☐
☐
☐

- ・鉄道などの公共交通機関の利用はどうか？
- ・何が一番不便か？（鉄道、バス、道路）
- ・林業、農業についての人での問題についてはどう思うか？
- ・外の人が入ってくるのに抵抗はあるか？

交通について

☐
☐
☐
☐

- ・大学生という人材をどう見ているか？
- ・外の人が入ってくるのに抵抗はあるか？
- ・もし山村留学などを受け入れたとしたら、
どんなことを教えられるとおもうか？
- ・空き屋の利用についての使用可能かどうか？

町民以外の人について
どう思っているか

☐
☐
☐
☐

- ・住民が川前のパンフレットをみたことはあるか
- ・川前のマップを作成するにあたり一番載せてほしいものは？
- ・パソコンは使えるか？
- ・誰にアピールしていきたいか？

川前の魅力を発信するとし
たらどうするべきだと思うか

「家族の年齢と家族構成について」

- ・川前は好きか？

図 3 聞き取り調査表

(3)調査スケジュール

7 月 21 日	事前ワークショップ
8 月 7 日	午前：現地入り、川前町全体を把握するための視察 午後：現地支所職員による説明、質疑応答
8 月 8 日	午前：聞き取り調査 午後：聞き取り調査、まとめ作業
8 月 9 日	午前：聞き取り調査 午後：まとめ作業、ひまわり会議準備、第 1 回ひまわり会議
8 月 10 日	午前：予備調査
10 月 11 日	高部区例題祭参加
10 月 12 日	高部区地域資源調査
11 月 18 日	県民討論会の事前打ち合わせ
11 月 19 日	集落活性化県民討論会 in 会津
11 月 30 日	午前：集落活性化のための打ち合わせ（いわき市） 午後：集落活性化県民討論会 in 福島
12 月 20 日	ふるさと福島 大交流会（池袋サンシャインシティ）
3 月 6 日	第 2 回ひまわり会議
3 月 7 日	高部区地域資源調査

Ⅱ 調査結果

1. 事前調査

高部に行く前に、高木先生の指導のもと事前ワークショップを行いました。KJ 法※を用いて、高部に対する事前イメージをまとめていきました。



図 3 いわき市川前町第 9 区調査前の学生の持つイメージ

意見をまとめた結果、プラスのイメージが少なく、自然が多いことやセカンドライフに適しているのではないかという意見がでました。対してマイナスイメージは多く、交通面での不便性や若者の減少に関する意見が多く、「いわき市」や「高部」と聞いてもイメージがわからないという意見が出ました。

総じて事前イメージだけではわかることが少なく、調査に対する不安が出てきました。

※KJ 法…文化人類学者の川喜田二郎（東京工業大学名誉教授）がデータをまとめるために考案した手法のことです。データをカードに記述し、カードをグループごとにまとめ、図解し、論文等にまとめてゆく手法です。KJ とは、考案者のイニシャルに因んで付けられました。

2. 聞き取り調査

○生活

- ・移動販売「ときわや」が月曜・木曜に来るので、それに頼る。
- ・買物は2週に1回
- ・車は持っていない。自動車免許も持っていない。
- ・特に不自由はない。電車はここ7年前まで乗っていない。バスも乗っていない。
- ・川前は嫌いだけど、住まなくてはやっていられない。
- ・1・10・20日に回覧板を回す。
- ・移動販売があるため、車がなくてもOK
- ・車で平へ買い物。軽トラは畑用。
- ・電気は昭和1年頃に来た。
- ・買物は車だけ。
- ・必要なものがあったら安心だけど、使わない。
- ・情報手段はテレビだけ
- ・食べ物が不便。変ったものが食べたい。
- ・新聞、郵便は他の家を見回れる為に、コミュニティをとれる。1人暮らしは70人ほど。
- ・買物は、母は小野新町、長男は平で済ませる。
- ・健康が不安。
- ・今は消防団が外門集落と一緒にになった。
- ・PCを持っている。インターネットも繋いでいる。
- ・川前は住みにくい。散髪屋がない。
- ・車を持っている。
- ・昔の道はもっと細かったが、今は舗装されている。
- ・釣り・買い物が楽しみ。
- ・駅からのバスがあればいいなあ。（バスがないと不安）
- ・老人会の旅行が楽しみ。

- ・車がなくなった時が不安。
- ・医療関係・買物が不便
- ・携帯電話が使えるようになるとよい。
- ・車がなくなれば不安。
- ・救急車の到着が 30 分では不安。
- ・集会所は分校だった
- ・バスが復活すれば良い。
- ・近くに仕事がない事が一番心配。
- ・外の水道は山の水
- ・病院への送迎バスがある
- ・近隣とのコミュニケーション（話が伝わるのが早い）
- ・行事は病気でも行かなくてはいけない為に苦痛

○自然・景観

- ・秋の鹿又溪谷が綺麗。魚獲りをした。
- ・川で泳いだことはあるが、危険な場所は特にない。
- ・ツツジが綺麗だが、掘ってなくなってしまった。
- ・紅葉が綺麗。
- ・川では泳がない
- ・160 匹くらい魚が獲れる。
- ・鹿ノ又溪谷の発電所から下流の紅葉がきれい。
- ・川で遊んだことがある。ソリでも遊んだ。
- ・鹿ノ又溪谷の春がきれい。
- ・鬼ヶ城からの朝日・夕日がきれい。→活用すれば良い
- ・飛行機の飛ぶ景色がきれい。
- ・鹿ノ又溪谷の魚のつかみが雑誌に掲載され、客が来るようになったが、狭い道に車を停める為に、通行の迷惑。
- ・川前は年中美しい。
- ・子どものころに虫捕りをしていた。蛍がいる。
- ・自宅前の川で今も釣りをしている。主にイワナ。
- ・仕事は山。木を伐採すると山菜がとれる。
- ・夏に昆虫採集をしていた。
- ・タラの芽・キノコ・イノシシがとれる。
- ・緑が多い。
- ・山菜とりでわらびをとっている。
- ・川遊びをしていた。（自宅前の川）

- ・庭でホタルが見られる。
- ・蛭が昔より増えた。
- ・昔はトロッコ列車が走っていた。
- ・紅葉がきれい
- ・自宅のシバザクラが綺麗。
- ・昔は雪が 3m も積もっていた
- ・雪が積もるたびにアイスバーンになるが、慣れた。



写真 1 聞き取り調査の様子 1

○産業

- ・息子さんと稲刈りをやっている。
- ・養蚕もやっていた。
- ・昔は炭焼きもやっていた。炭焼きは何の木でも良い。大変。
- ・花と野菜を栽培するのが楽しみ。
- ・現在牛を飼っている。昭和 34 年ごろまでは馬も飼っていた。
- ・花・野菜（キュウリ・カボチャ・ナス・マメ・ダイコン）・田（35a→8 俵→1 俵は自分が食べる。その他は農協へ）をやっている。
- ・牛も沢山いたが今は少ない。
- ・米だけは作る。（8 たん）ご飯は大切。田が第 2 の職業。
- ・昔からの本能で田畑を続けている。（田（3 たん）・畑（自宅・親戚・ご近所の分）
- ・ナス・キュウリを栽培（農薬は使わない）
- ・牛がいる（親 3 頭・子 3 頭）
- ・野菜作りが職業。
- ・健康のために田畑を少しやっている。

○伝統・文化

- ・昔は盆踊りをやっていた。
- ・今では足が悪くて祭りには行けない。
- ・五右衛門風呂を使っていた。五右衛門風呂は体に良い。
- ・祭りは子どもが行かない。 20 年前までカラオケ大会をやっていた。
- ・10 月第 2 週に鬼ヶ城祭り
- ・お祭りはまとまるのが大変
- ・不便はない。 なんでもやる。
- ・祭りは 10 月にあるが、年寄りの酒飲みで終わり。
- ・原人（3 人）が山奥で自給自足をしていた。（交流はない）
- ・しし鍋を作っている。（コーラでつける）
- ・郷土料理にもろっこ豆や凍み餅・キノコ料理がある。

○現状・展望・活性化

- ・息子さんが後継ぎをしてくれる。
- ・川前のパンフレットは見たことがない。
- ・景色のよい所をパンフレットに載せるとよい。
- ・子どもがちょくちょく来る。
- ・TV「田舎に泊まろう」は拒否。
- ・「納骨をしてくれれば後継ぎしなくてよい」と息子に言った。
- ・次女が年4回帰ってくる。
- ・仕事をやめて5～6年が経過。
- ・農業体験は受け入れOK
- ・旅行（高部の老人会）が楽しみ。最近は那須へ行った。
- ・「ひばり会」という団体がカラオケをやっていた。
- ・川前が「好き」なのかということを考えたこともない。
- ・70年間生きてきたから川前に残る。
- ・PCは使えない。使ってもしょうがない。
- ・不安はない。考えたこともない。
- ・人を知ってからでないと空き家は貸せない。大学生に抵抗がある。
- ・川前をよくすることは不可能。いかに現状の歯止めをかけられるか。
- ・凍み餅、10個で1200円→売上で婦人会の旅行に行っていた。
- ・まさか我が村が過疎になるとは思わなかった。
- ・長男に継いでくれないと困る。
- ・農業体験はちょっと無理。自分の家だけで精一杯。
- ・定住は良いが、好き勝手にやられては困る。
- ・昔から川前に住んでいる為こしかな。住めば都（長男より）
- ・川前は好き。生まれた所だ。落ち着く。（奥さん）
- ・農村留学の受け入れは難しい。力不足。どこまで対応できるか。
- ・若い人がいない。定住は歓迎。
- ・私は川前が好きです。
- ・川前の全部が良い。（ex.川のせせらぎ）
- ・大学生には何かしてくれるのではないかと期待している。
- ・農業体験はやっても良い。
- ・高部の良さが分からない。
- ・農業体験は良いと思う。
- ・後継者が必要
- ・川前の将来の予想がつかない。



写真2 聞き取り調査の様子2

- ・息子は長距離トラックドライバー。
- ・大学生は高部にとっては活気があって良い。毎年来い！！
- ・外の人・農業体験も歓迎。しかし、自分が教えられるかが不安。
- ・高部は好きです。
- ・高部は生まれた場所。心が休まる。
- ・家の裏に空地があるので利用可能。
- ・空き家は火災の不安がある。
- ・空き家は使わないと老朽化してしまう為、どんどん利用すべきだ

聞き取り調査後、いただいた意見を参考にして KJ 法でまとめました。意見には「川がきれいだ」とか「秋の紅葉がきれい」「おいしい食材がある」など豊富な地域資源があることが分かった。一方で、「若者がいない」「お祭りが盛り上がらない」「健康の不安」など人的資源の面で多くの問題があることが分かりました。

高部集落の皆様から頂いた意見・キーワード



図 4 高部集落の意見・キーワード

3. ひまわり会議

聞き取り調査の結果をもとに住民との交流を図る目的で、ひまわり会議を行いました。会議では、聞き取り調査の報告、いいところマップの作成、高木亨先生の講演を行いました。調査報告では、住民同士でもあまり知られていない伝説や昔のお話も出てきて、学生以上に住民の方々も感心して聞いていました。いいところマップ作成では、出てきた情報を地図に落としていく作業を行い、皆さんの知識を振り絞って地図を作っていました。時には、熱く議論する場面もあり楽しく進められました。最後の高木先生による講演は、皆さん真剣に聞いていました。「よそ者、ばか者、若者」の話や、地域の度量をポパイに例えるなど分かりやすく楽しい講演となりました。短い時間ではありましたが、住民の皆さんとの距離の縮まるとても貴重な時間でした。



写真3 ひまわり会議の様子1



写真4 ひまわり会議の様子2



写真5 A班のいいところマップ



写真6 B班のいいところマップ

4. 調査を通しての変化

変化としては、まず学生の変化が挙げられます。事前調査では「特徴がない」、「不便」、「地域資源が少ない」など高部に対して比較的マイナスのイメージを抱いていました。また、他の地域の事例も調べてみたところ、本来主体となっていくべき住民に意欲や気力がなく、外部の人間に対して内向的であるために活性化策が思うように進められず、行動に移すことができないというケースもあることを知り「本当に活性化なんてできるのだろうか？」と不安が募る一方でした。

しかし、現地での聞き取り調査を通して、高部の方々の「優しさ」や「もてなしの心」、「心の温かさ」を感じていく中で我々の不安が徐々に取り除かれ、心境にも変化が訪れました。そして、聞き取り調査後のワークショップでは、住民の方々が積極的に意見を出し合っており、「高部もやるじゃないか」、「まだまだいける」といった感想を聞くこともできました。我々の中で「絶対に何とかしよう」という意気込みが生まれました。

次に住民の変化としては、最初の聞き取り調査を行っている際には、高部に対して興味関心のない住民も多く「何もないから（高部が）好きではない」、「将来が不安」、「車がないと動けない」など後ろ向きの意見が多数見受けられ、少し不安な面もありました。しかし、後日開かれた第1回ワークショップ（ひまわり会議）では白熱した議論の中、住民同士でさえ知ることのなかった名所や言い伝えを互いに共有することができ、「意外に（いいところが）たくさんある」、「高部もまだまだいける」、「ふるさと再発見だね」など多くの前向きな意見を頂きました。

つまり、この一連の調査を通すことが高部に潜在していた魅力を引き出す一つのきっかけになり、我々としても「人を動かすのは人でしかない」の言葉を改めて実感する機会になったことを強く思っています。



写真7 学生の変化



写真8 住民の変化

そこで、私たちは次のようなサイクルがあることに気がつきました（図5）。

大学生など外部の人間が対象地域に訪れ、地域住民に刺激を与えることで①、住民自身や調査を行った外部の人間の心境に変化が生じます②。それは地域の再発見であったり、意欲が増してくることであったりします③。そして、その刺激が行動につながり、何か新しいことにチャレンジするようになります④。これにより、地域が発展し、また外部との新たな交流が生まれ次のサイクルが生まれます⑤。

このようなサイクルは、高部では成立しているのではないかと思います。その背景として、まず地域の度量が挙げられます。いくら外部の人間が活性化を行いたくても、それを受け入れられるだけの地域の度量が必要になります。その点、高部集落は区長をはじめ集落の方々が大学生を受け入れて頑張ってみようと考えて下さいました。これと併せて必要となるのが、学生のやる気です。中途半端な気落ちではなく、一生懸命になって地域のことを考えて行動した結果、集落の方々に認めて頂き、今回のようにスムーズな調査が行えたのだと思います。このどちらかでも欠けてしまうと、サイクルは回り始めないのだと思います。

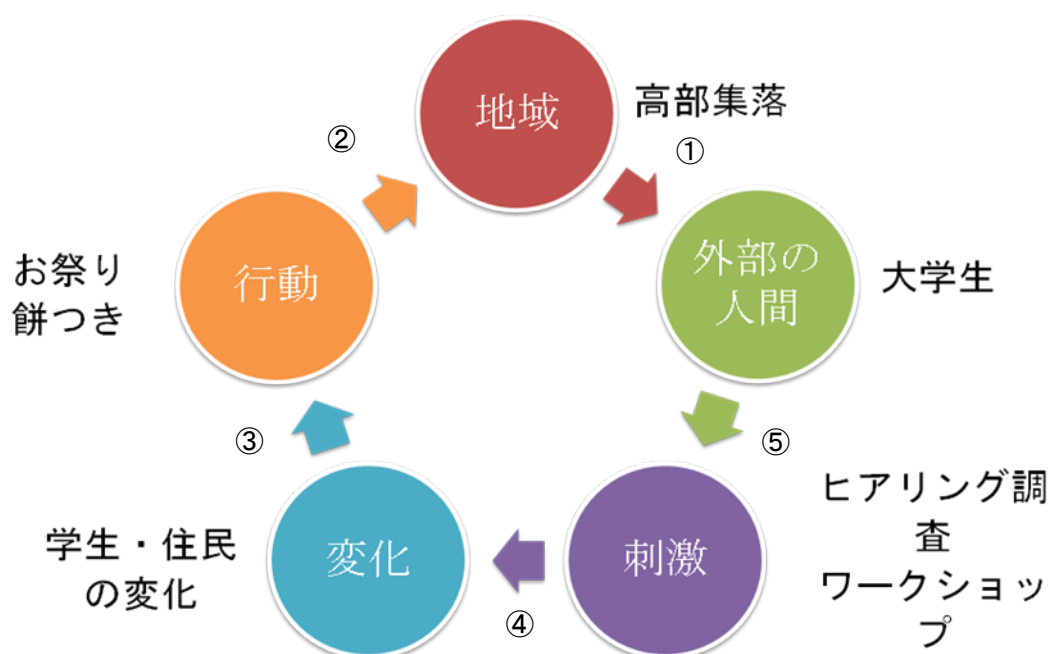


図5 地域活性化のサイクル

Ⅳ 活性化案（こころの活性化にむけて）

1. 全体像

私たちは11月14日に行われた県民討論会で高部の活性化案について発表しました。一つ目はPR大作戦です。これは高部の魅力、楽しさを高部出身の方、出身者以外の方々に知らせることを目的とします。二つ目はイベント盛り上げ隊です。これは高部を離れて暮らしている高部出身者の方々に、お祭りやその他のイベントの時に帰ってきてもらえるよう、楽しいイベントを企画し、大学生と一緒に作り上げるというものです。三つめは高部体験です。これは高部で味わえる農業体験や、民泊を通して高部のよさを知ってもらおうというものです。

この県民討論会で発表した活性化案を3月6日の第二回ひまわり会議で高部の方々に発表し、住民の方々のご意見を色々いただきました。そうして、私たちは県民討論会で発表した三つの活性化策をさらに「すぐにとりかかれる活性化案」と「将来的に実行したい活性化案」の二つに分けることにしました。

2. すぐにとりかかれる活性化案

①PR 大作戦

PR 大作戦と題し、多くの方々に高部を知ってもらうための広報活動を行います。まずは、高部を離れて暮らしているの方々に対して、集落の近況をお伝えする高部新聞を発行します。今まであまり高部の近況を伝える物がなかったので、定期的に大学生と住民と協力をして発行していきます。

高部新聞の発行

HPの更新

②休耕田の活用

休耕田をひまわり畑に変えて新たな見所をつくります。

③いいところマップ

いいところマップを活用して、遊びに来た人たちと高部地区の人たちとの



図6 高部いいところMAP

交流をめざします。

④ビアガーデン

ほたるの時期に高部公民館を活用したビアガーデンを開設します。集落の人たちの交流の場を作り出します。

⑤イベント盛り上げ隊

地区の行事の記録、撮影を行います。またホテル観賞会などを企画運営します。

⑥大学祭の活用

地域間交流促進のため、大学祭でのブース展示・特産品の販売を行います。

⑦高部体験

手始めとして、田植えを実施します。5月22日実施予定。あわせて、高部公民館での宿泊体験も実施します。

3. 将来的に実行したい活性化案

①PR大作戦

高部から出て行った人を呼びもどす

県内外の人を呼ぶ

②高部体験

農業体験：住民と大学生と一緒に田植えをしたり、キノコの栽培を一緒におこなったりする。

釣り体験：高部集落を流れている川で川釣りを体験する。

大学祭とのコラボ：農業体験、釣り体験で収穫された農作物などを大学の文化祭で販売する。

田舎体験：郷土料理、山菜取り、川釣り、ホテル観賞を通して田舎のよさ、高部のよさを感じてもらう。

農業体験：田植えや、畑仕事、炭火焼などを体験してもらい、農業の大変さなどを知ってもらう。

山村留学：田舎体験、農業体験を子どもたちにも体験してもらう。また、高部集落の住民の方の家に泊まることによって、真の高部の魅力を知ってもらう。

③集会所・空き家の活用

V おわりに

今回の調査でもっとも心を打たれたのは、集落の方々のもてなしでした。聞き取り調査で一軒一軒を訪問した際に、お菓子や飲み物、とうもろこしを振舞って頂き、中には凍み餅という郷土料理を振舞って下さった方もいました。

また皆さんがとても明るかったということにも驚かされました。我々が緊張してカチカチになっていると、集落の方々自らが進んで色々な話をして下さいました。問題点や不満点など包み隠さず話して下さいました。話を聞いていると皆さんのペースに巻き込まれて、次第にこちらまで楽しくなってきました。また「高部は好きですか？」というストレートな質問にたいしても、ほとんどの方はすぐに「高部が大好きだよ」と、返してくれました。「自然が大好き」、「自分の生まれた場所だし好きになるよ」と、自信満々に答えてくれました。これこそが「郷土愛」ではないかと感じ、強い衝撃を受けました。

私たちはこうした人柄や郷土愛をもつ高部の雰囲気ですっかり飲まれてしまい、最初は活性化なんてできるのかと不安に感じていましたが、いつの間にか高部のことが大好きになってしまいました。福島は遠いけれど高部集落をいい方向に導きたいと思いました。集落の方々のパワーで我々の気持ちも大きく変化しました。完全に高部集落の方々の熱さにやられてしまいました。

今回の調査を通して、人と人がふれあうことの素晴らしさ、お互いが熱い気持ちを持って取り組めば出来ないことはないことを痛感しました。経済的な活性化は出来ないかもしれませんが、人を前向きな気持ちに変えること、「こころの活性化」ができるのではないかと感じました。

謝 辞

本報告書を作成するにあたり、調査にご協力いただきました高部集落区長の根本秀一さんをはじめ、集落の皆様には大変お世話になりました。「よそ者」である我々大学生を気持ちよく迎えてくださり、ありがとうございました。

本事業全体を通して、福島県企画調整部地域振興課の十二所謙さん、いわき市川前支所地域振興担当員の柳内博明さん、引率して下さった立正大学地球環境科学部非常勤講師の高木亨先生には大変お世話になりました。ここに記して、厚く御礼申し上げます。

平成 21(2009)年度
大学生の力を活用した集落活性化調査委託事業 報告書

こころの活性化

編者：立正大学 熊谷地理研究所

(代表 浜田大介)

〒360-0194

熊谷市万吉 1700 立正大学非常勤講師室気付 (高木)